

大國主の命の成人戒の条を初めとして、記には「鳴鏑」の記事が多いのは、古人が音響に威怖感を抱いた例証であろう。そのことはまた、弓の弦鳴りの音に格別の意味を感じたことを示していると思ふ。「弦打ち」「鳴弦」の儀が、後世も長く、破魔・征魔の威力あるものとして行なわれたのは、この故にほかならない。そうした意味でも、私は「弓」の語源を、弓の弦鳴りの擬音語から発生したものと考えている。弦楽器の発生、発達もまたここにあったことは、当然のことであろう。とまれ、記所伝の弓が、厳肅な神事を伝える

## 万葉集の方法論を探る

四千五百余首の歌を収録した古代歌集「万葉集」は「多様な詩集が総合されたもの」<sup>注1</sup>であって、方法論を方向づけることはきわめて困難な事であるから、いきおい「自らの歩まんとする心構えと自らを戒める言葉」<sup>注2</sup>としてのべていき、究極的には「文学を味ふ心はすなほな心でなければならぬ」<sup>注3</sup>という言葉にかなっているかどうかに尽きるのではないか。文学研究はあくまでも「読む」という「積極的普遍的行為」の「障害除去」を目的とした「消極的専門的」<sup>注4</sup>であるから、万葉集にしても歌一首一首に凝縮された作者の全量は一つ一つの表象語に微妙に作用しているのであって、それを「知る」

条項に登場していることは、注意しなければならない点であろう。弓はまた考古学的にも好個の対象として多くの出土品が報告されているが、石器や土器・金属器と違って、ほとんどが腐蝕してしまつたため、体系的な研究のできがたいのが残念である。それにしても、火薬の発明までの長い期間、人間生活の日常必需の道具として重要な意味を持っていた弓は、精神生活にもまた大きな関係を有していたはずであり、この点に、今後の古代学の一面があるものと考えている。

## 町 方 和 夫

世界・味読の世界に高める精神的行為の基盤が文学としての万葉集研究であろう。文学研究の最重要な特性は「自由であること」<sup>注5</sup>に帰一するのであるから、大胆率直な新見を吐くことも許されよう。<sup>注6</sup>その意味において、万葉集に限らず、すべての文学作品を物質的存在あるいは心理的存在の客体化としてその成立過程を探索する場合に二大別して、文献学的方法と哲学的方法になる。作品を物質的存在として物理的に帰納せしめようとする科学的なあまりに科学的な方法のもたらす *microme* な *probability* を求める傾向にはしりやすく、ことばの生命を無視した把握のしかたである静態的研究に

よって一首の歌に凝縮した作者の精神世界を齊一的結果で処理することになる。いいかえれば、表現された文学事実を分析して諸学的に定位づける成果をあげることにとどまり、文学作品の誕生にいたる万葉人の心理作用の解明に到達しえないことになる。

「文芸の場合には美と思想とは常に相伴っている<sup>注7</sup>」というのであるが、「美」は絶対的理想美を希求する究極の目標として主体的に存在するものであって、その内実は人為的に意識生産されていく思弁的感情美であり、その素地は思潮・思想に負うものであって、その受容いかんによって「美」の形象化はことなってくる。文学における「美」は客体として存在するものでもなければ、純粹に「直観するもの」ではないと考える。作者の生活する時代の思潮・思想を素地とする意識的「直観するもの」、無意識的（潜在意識）「直観するもの」が一首の歌に「美」として形象化される場合に、作者の知的直観を反映しうる一首の歌の表象語の持つ、作者の「美」を形成する思想的諸因子の解明が必要である。文学における「直観」は即「感動」ではないだろう。「直観」を即「感動」と見做すならば、それは生物学上の反射感覚であって文学誕生以前において可能としなければならぬ<sup>注9</sup>。文学の世界における「直観するもの」の「美」は生活する時代の思潮・思想にもとづく知的経験による受動的直観の「美」である場合と能動的直観の「美」の場合があるろうかと思う。社会秩序・国家意識が確立されるにしたがって、人間の経験と連携を通じて湧出する諸思想が「美」を判断するのであって、「美」の感動は自然界畏怖の感情それ自体からは生まれえないのではなからうかと考える。「美」を本能的に直覚する喜悦の発露に淵源を求めることも可能ではあるろうが、それは、文学においては「美」

以前の美の感情表出であって文学上の「美」ではないだろう。文字を通じて形成される「美」は作者の思想と作者の思想形成に影響を及ぼす時代思潮とを基盤とした作者の判断の感情表出が文学における表現の「美」を創造するものであろうと考える。

万葉時代はまさにそうした文学「美」形成の第一期に相当するものであろう。いうまでもなく、万葉時代は律令制定・国史編纂・仏教興隆・曆法採用の時代であるから、習俗的旧思想が漢文化の影響による受用をした場合に、混融変改した発展的異質の思想の誕生をうながし、文学「美」を形成する。そこに万葉人の受動的あるいは能動的心理の推移を忖度することはきわめて重要なことであろうと考える。

万葉集の歌一首一首には、意識的、無意識の意識的を問わず、思想や思潮を反映していると考えて、一首の歌における主たる表象語の内包する概念が一首の歌の独自の歌語としていかに作者の思想を凝縮してゆくかの究明こそ作者の創作心理や表現「美」の志向を解明することになるのではないだろうか。古事記の序文が音訓交用の辞理意況の事の趣を残そうとした意図は漢籍に対応するわが国の古事文の集大成のもくろみばかりでなく、後代に示す文学的矜持ではなかったろうか。万葉集においても、裁歌の趣をのべ、拙劣歌の除外など家持をめぐる周辺には相当に高度な潤徳光身の文学観が定着しているのだから、万葉集の文学「美」がいかに形成されていくかの作者の思想的諸因子を求めなくてはならない。

例えば、「和銅四年歳次」の巻二挽歌部の題詞にしても、巻三挽歌部の類同の題詞と対照してみても「歳次」の二文学の有無は簡単に処理できるものではなく、「歳次」が死喪とかかわりのある語とす

ると、編纂の時点、編纂者の関心、伝誦の経路等の題詞に内在するものが巻二のそれと巻三のそれとでは明確な差異が生じてくることになる。また、「嬢女」「美人」についても、単に表記の差異がみられるばかりでなく、編纂時の編纂者の心理をたどりうるものと考ええると、本来的には同一性をうかがわせるに十分ではありながらも、巻二、巻三の挽歌部の「和銅四年」以降を補遺編纂とした場合に、編纂時または編纂者の心理の差異が思想背景に負う受用と表記の関係に働いていることになる。すると、「歳次」の有無と題詞中の「嬢女」「美人」の表現の相違は編纂者の心理にかなりの差異があり、河辺宮人に対しても巻二挽歌部の補遺編纂の場合と、巻三挽歌部におけるそれとでは入手経路や収録事情や編纂者の文学的判断が異なっているであろうから、作歌時点より編纂時点に至るまでの心理的受用の推移<sup>注12</sup>を動態的に捉えなければならぬ。

別の例をあげると、水江の浦島の歌において、亀姫の在・不在は作歌時の作者の心理を解く上でかなり重要なのであって、一概に原浦島伝説には亀姫は存在しなかったという理由で亀姫の不在を素通りしてはなるまい。既に風土記等において、そうであるように、亀姫は浦島伝説の中に定着しているのであるから、亀姫は伝説を構成する素材としてはかなり重要である。それを剝落した作者の心理には社会的・思想的背景にもとづく強い意志が反映しているのであるから、歌の完成にいたる間の作者の心理的受用の面から動態的に追究しなければならぬ。<sup>注13</sup>

このように素材なり、表現なりは、一首の歌を構成するにあたって、作者の意志を決定する社会的・思想的諸因子の作者あるいは編纂者の心理的受用に作用されており、いわば連動関係にあるのである

るから、この方面の追究が「言霊の韻律的活動による万葉精神に触れ<sup>注14</sup>」ることになるのではないかと考える。

結論的にのべると、文学研究が科学的研究の方向に進捗するに従って物質的な単一の現象として把握され易くなり、その「あじわい」を見失ってしまう危険をはらむもののように思われるものだから、文学研究の一方向として、作者の実生活の周辺にある諸事象と作者の意志・判断を決定する思想的諸因子と愛憐無限の情の醸成と輻輳とが作歌の対象たる客体に及ぼす過程を表現語に追求することが大事である。

文学は絶えず流動する思弁の世界であり、万葉の歌もまた流動する思弁の世界の結晶片岩である。「美」は絶えず晶出し剝離する。「美」の表現世界の受用は、その表現の直前の具体的存在としての事実を超越して、事実の形相、機能等を作者の経験と思弁で昇華した思想表象語が表現の世界に押し出されてくる。この蠕動活動に似た表現活動はあきらかに動態なのであるから、作者あるいは編纂者の思想的諸因子に基づく表現上の心理操作を究明する動態的研究が大事であり、それが「全量を遅滞なく受け入れる」ことを果す「読む」行為を満足せしめる奉仕をはたしうるのではないだろうか。

以上、きわめて抽象的な方法論を摸索してみれが、既にそれぞれの諸学的方法論においてかなり論及されていることであって新味に欠けるのではないかと羞じる次第である。

注1 『万葉集』の美と思潮 岡崎義恵氏。

注2 『万葉集の研究』所収。「万葉集研究の方法と本質」序。久松潜一

氏。

注3 『上代国文学の研究』自序。武田祐吉氏。

注4 『日本文学研究法』高木市之助氏。

注5 注4に同じ。

注6 「訓釈のきめ方」へ解釈と鑑賞昭和34年5月号V木下正俊氏。

注7 注1に同じ。

注8 『心理学』（ウィリアム・ジェームズ著、今田恵氏訳）緒論に「吾々の内的諸能力は、吾々の棲息する世界の諸相に予め順応して居ることが

わかった。」という。

注9 『心理学』（前掲書）、感情総論に「感覚は意識する際の最初のものである」「嬰兒の有つ一番初めの感覚は彼にとって外部的宇宙であ

る」といふ。

注10 『古事記』序。

注11 『懷風藻』序。

注12 『心理学』（前掲書）意識の流れに「一度過ぎ去つた状態は再び

且つ前の時と同一であり得ない事である。」「外界より入り来る刺激の流れが常に全く同一なる身体的感覚を二度与へるものであると云ふ証拠は少しもない。」という。

注13 「古代文学11号」に「高橋虫麿の態度」と題して、筆者は龜の在不

在をめぐって心理説明をこころみた。

注14 『万葉集研究法』武田祐吉氏。

注15 『上代国文学の研究』自序。武田祐吉氏。